南あわじ市文化財調査報告書　第12集

木戸原遺跡Ⅰ

－経営体育成基盤整備事業（市西地区１・２工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

２０１５ 年 ３ 月

南あわじ市教育委員会

はじめに

南あわじ市では、このたび平成17年度に市西地区で行った埋蔵文化財発掘調査の成果を『木戸原遺跡Ⅰ』として刊行する運びとなりました。

全国的には終了しつつある圃場整備事業でありますが、県内でも有数の農業地帯である当市では現在も圃場整備事業が続いており、埋蔵文化財保護行政にとって非常に厳しい状況であります。しかし、一方で発掘調査によって得られた新たな発見の増加により、古代の南あわじ市の重要性や、他の時代においても非常に興味深い地域であることがますます明らかになりつつあることは、当市の文化財保護行政にとって喜ばしいことであります。

なにかと暗い話題の続く昨今でありますが、未来への糧として地域の歴史を次代に継承していくことが現代社会に生きる我々の重要な責務と認識しております。

今後もさらなる努力により地域史の解明と当市の文化財保護と理解に努めていく所存ですので、ご支援賜りますようよろしくお願いします。

最後になりましたが、本書を作成するにあたり、ご指導ご協力いただいた方々に対し、厚くお礼申し上げます。

南あわじ市教育委員会
教育長　岡　田　昌　史

例　　言

1．本書は兵庫県南あわじ市志知中島・市新・市三條に所在する、木戸原遺跡の発掘調査報告書である。
2．経営体育成基盤整備事業（市西地区１・２工区）に伴い、兵庫県淡路県民局の依頼を受け、平成17年度に南あわじ市教育委員会（南あわじ市埋蔵文化財調査事務所）が遺跡範囲確認調査および本発掘調査を実施した。調査体制は第１章１節に記す。
3．遺構の実測は外業作業員が、写真撮影は調査担当者が、遺物の写真撮影は定松佳重・的崎薫が行った。また、遺物の実測は定松・的崎が、清書は豊田亜希子・白川裕二がデジタルトレースを行った。
4．本書の執筆は目次に記す。編集は定松が行った。
5．調査の記録及び出土遺物については、南あわじ市教育委員会で保管している。
6．発掘調査にあたり、下記の方々にご協力・ご指導いただいた。ここに記して深く感謝の意を表する。（敬称略）

市西地区土地改良区　淡路県民局土地改良事務所　公益社団法人 南あわじ市シルバー人材センター
兵庫県教育委員会　伊藤宏幸　浦上雅史　定森秀夫　森岡秀人　森本徹

凡　　例

1．本書に記される標高は東京湾平均海水準を基本とする。
2．各調査区の平面図の方位は磁北を示す。
3．層序図の色調は『新版標準土色帳』（農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究会監修）を参照した。
4．土器実測断面は、弥生土器・土師器が白色、須恵器が黒色、陶磁器が灰色とした。遺物実測は縮尺１／４を基本としている。

目　　次

第1章　調査経緯　……………………………（定松）・・1

第2章　周辺の環境　……………………………（定松）・・2
　第1節　地理的環境　……………………………・・2
　第2節　歴史的環境　……………………………・・3

第3章　調査内容　……………………………・・6
　第1節　遺跡概略　……………………………（定松）・・6
　第2節　1次調査（遺跡範囲確認調査）　……………（定松）・・7
　第3節　2次調査　……………………………・・12
　　1．1区概要　……………………………（定松）・・12
　　　1）溝
　　2．2区概要　……………………………（定松）・・13
　　　1）掘立柱建物
　　3．3区概要　……………………………（定松）・・13
　　　1）溝
　　4．4区概要　……………………………（的崎）・・16
　　5．5区概要　……………………………（的崎）・・16
　　　1）溝
　　　2）土坑
　　6．6区概要　……………………………（的崎）・・19
　　　1）掘立柱建物
　　　2）竪穴状遺構
　　　3）溝

第4章　総括　……………………………（定松）・・24
　第1節　弥生時代
　第2節　古墳時代
　第3節　奈良・平安時代
　第4節　中世

挿　図　目　次

図1　遺跡の位置・・・・・・・・・・・2
図2　字名位置図・・・・・・・・・・・2
図3　周辺の主な遺跡・・・・・・・・・4
図4　1次調査区設定図・・・・・・・・6
図5　1次調査　平面・層序図1・・・・8
図6　1次調査　平面・層序図2・・・・9
図7　1次調査　平面・層序図3・・・・10
図8　1次調査　出土遺物・・・・・・・11
図9　2次調査区設定図・・・・・・・・12
図10　1区　平面・層序図・・・・・・・13
図11　2区　遺物包含層出土遺物・・・・13
図12　2区　平面・層序図・・・・・・・14
図13　2区　建物1　平面・層序図・・・14
図14　3区　平面・層序図・・・・・・・15
図15　5区　平面・層序図・・・・・・・17
図16　5区　遺構13　平面・層序図・・・18
図17　5区　遺構21　平面・層序図・・・18
図18　5区　遺構23　平面・層序図・・・19
図19　5区　出土遺物・・・・・・・・・19
図20　6区　平面・層序図・・・・・・・20
図21　6区　建物1　平面・層序図・・・21
図22　6区　遺構15　平面・層序図・・・22
図23　6区　遺構34　平面・層序図・・・22
図24　6区　出土遺物・・・・・・・・・23

写　真　図　版　目　次

図版1　調査地遠景
図版2　調査地南部近景（西より）
　　調査地東部近景（東より）
　　調査地北部近景（北より）
図版3　№7　完掘状況（北より）
　　№9　完掘状況（北より）
　　№38　完掘状況（東より）
図版4　№43　完掘状況（南より）
　　№59　完掘状況（北より）
　　№130　西壁
図版5　№143　完掘状況（北より）
　　№145　完掘状況（東より）
　　№159　完掘状況（東より）
図版6　1区　完掘状況（南より）
　　2区　完掘状況（西より）
図版7　3区　完掘状況（北より）
　　5区　完掘状況（西より）
　　5区　中央部完掘状況（東より）
図版8　5区　遺構2（東より）
　　5区　遺構5　南壁
　　5区　遺構9　南壁
図版9　5区　遺構23　遺物出土状況（南より）
　　6区　完掘状況（南より）
　　6区　完掘状況（北より）
図版10　6区　遺構15　完掘状況（西より）
　　6区　遺構34　完掘状況（西より）
　　6区　遺構34　遺物出土状況（東より）
図版11　1次調査出土遺物
図版12　1次調査出土遺物
図版13　1次調査出土遺物
図版14　1次調査出土遺物
図版15　1次調査出土遺物（上・中段）
　　2区　遺物包含層出土遺物（下段）
図版16　5区　出土遺物
図版17　5区　出土遺物
図版18　5区　出土遺物（上段）
　　6区　出土遺物(中・下段)
図版19　6区　出土遺物
図版20　6区　出土遺物

第１章　調査経緯

平成17年より南あわじ市志知中島・市新・市三條・市福永で経営体育成基盤整備事業が実施された。事業面積は90haと大規模であり、三毛作を基本とする南あわじ市内でも専業農家が多く、広範囲に農地が広がる地域である。

平成13年度に分布調査を行った結果、事業対象地中央を南北に走る県道津名五色三原線より西側に多い傾向はあるものの、事業対象地全域で遺物を採集した。弥生土器と思われる土器片や石鏃、中世須恵器片を採集し、北に立地する円座遺跡や富永館跡などとの関連が考えられた。また、奈良時代の山惣廃寺近くでも須恵器片を採集し、古代寺院関連遺跡の可能性も想定された。

その結果を基に、平成17年度に遺跡範囲確認調査を実施することとなった。詳細は第３章第２節に記述する。遺跡範囲確認調査の結果を受け、平成17年７月に約154,400㎡を「木戸原遺跡」として遺跡登録した。

調査体制

平成17年度（発掘調査）

兵庫県淡路県民局　洲本土地改良事務所　整備第1課（市西地区担当）

課長	横川信行
課長補佐	上田健史
技術吏員	山上佳映・田村文明

南あわじ市教育委員会

教育長		塚本圭右
生涯学習文化振興課課長		岸上敏之
〃	課長補佐	榎本暉重
〃	係長	福田龍八
埋蔵文化財調査事務所調査員		定松佳重・的崎薫・谷口梢
〃	外業作業	新崎都・筒井健司・濱本善美
〃	内業作業	垣脇美奈子・豊田亜希子・桝本早苗

平成24～26年度（整理作業）

南あわじ市教育委員会

教育長		岡田昌史
生涯学習文化振興課課長		山見嘉啓（平成24年度）・福原敬二（平成25・26年度）
埋蔵文化財調査事務所所長		山見嘉啓（平成25・26年度）
〃	調査員	定松佳重・的崎薫
〃	内業作業	白川裕二・豊田亜希子

第２章　周辺の環境

第１節　地理的環境

淡路島は瀬戸内海最大の島で、北は明石海峡、南は紀伊水道、西は鳴門海峡、東は紀淡海峡に囲まれ、古来より畿内への入り口として海上交通の重要な役割を果たしている。南あわじ市はその南西部に位置し、兵庫県域の2.7%を占めている。2013年度の平均気温は16.0℃、総降水量は1,544㎜を測る。淡路島の中でもひときわ温暖な気候であり、三毛作が行われ、寒所を嫌うレタスなどの栽培が盛んである。

地質的には、花崗岩から構成される北部の津名山地と、砂岩や頁岩からなる和泉層群で構成される南部の諭鶴羽山地に大別され、諭鶴羽山地と南辺寺山塊の間には、面積約128㎢を測る島内最大の三原平野が形成される。平野は扇状地と三角洲で成り立っており、その境界付近には「出湧」と呼ばれる湧水地が多く点在する。

図１　遺跡の位置

平野西部に位置する木戸原遺跡は、南あわじ市内においても農業が盛んな地域である。本遺跡の西側には現在では水量は少ないが、かつては馬を乗り捨て舟で航行したといわれている馬乗捨川が流れる。

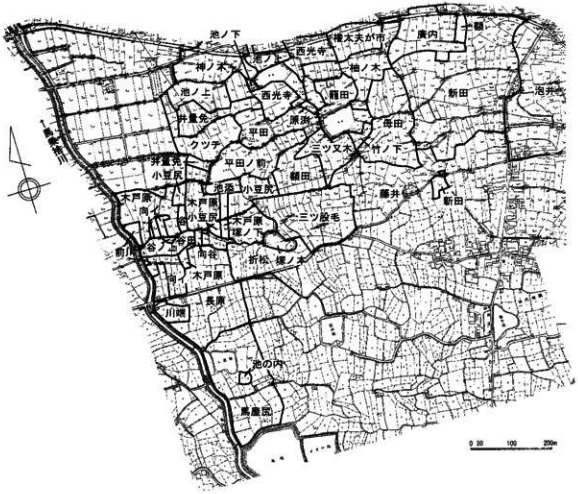


図２　字名位置図

第２節　歴史的環境

旧石器・縄文時代

調査地周辺で確認されている旧石器時代の遺跡は少なく、浦壁池遺跡(46)で国府型ナイフ型石器が採集されたのみである。

縄文時代の遺跡は、南畑遺跡(24)で多量のサヌカイト製石鏃と前期の爪型文の土器片を採集している。おのころ島遺跡(22)では中期の船元・里木式、谷町筋遺跡(10)では後期の縁帯文、幡多遺跡若宮地区(20)では中期末～後期初頭の土器がそれぞれ出土している。これらの遺跡は扇状地と三角洲の境界付近に立地し、出湧によって生活に必要な水を容易に入手できる地域である。また、平野西部の縁辺部に立地する大野遺跡(56)で晩期の縄文土器を確認している。

弥生時代

遺跡数は平野内で飛躍的に増加する。雨流遺跡(5)では前期の水田跡が検出され、嫁ヶ湖遺跡(52)では前期～中期初頭の竪穴住居や自然流路を確認し、木製品が多く出土している。中期から後期にかけては大日川中流域の谷町筋遺跡・鈩田遺跡(9)や志知川沖田南遺跡(6)などの他に、拠点集落となる幡多遺跡（下内田・行当地・若宮・野水地区）(18～21)や円座遺跡(33)・喜来遺跡(48)・護国寺東遺跡(58)・海棠子遺跡(45)・鐘原遺跡(65)などが出現する。特に海棠子遺跡は三原川、鐘原遺跡は牛内川の高位河岸段丘上に位置し、後期になると徐々に河川の上流域にも遺跡が展開するようになる。南辺寺山山頂には高地性集落と思われる西山遺跡(61)が立地する。

青銅器では、西原遺跡の銅剣14本や中の御堂遺跡の銅鐸２個体の存在が古くから知られている。幡多遺跡行当地地区（19）では土坑に廃棄されたと考えられる大阪湾型銅戈片が出土し、青銅器祭祀の終焉を考える上で重要な資料となった。

古墳時代

集落遺跡としては畿内政権と密接な関連が想定される中期の雨流遺跡をはじめ、鈩田遺跡・谷町筋遺跡・平松遺跡(62)・幡多遺跡下内田地区・片山遺跡(3)・おのころ島遺跡・辻ノ内遺跡(7)があり、その多くが河川の中流から下流域に展開し、縄文時代の遺跡分布と同様を呈する。

平野を囲む西から北にかけての丘陵上・山地裾部には、庚申塚古墳(4)・ハバ古墳(8)・佐礼尾古墳群(11)・長田山古墳群(13)・由ケ谷古墳(14)・宮田古墳(15)・入田山古墳群(16)・上八木古墳(17)・西山北古墳(53)・西山南古墳(54)・小山古墳(64)などの分布は確認できるが、標高が高い南東地域には分布が認められない。扇状地が発達した三原平野の河川上流域では礫が主体の土壌であるため水田経営に不向きであり、生活土壌としての不安定さなどが土地開発の遅れと関連するものと考えられる。

また、現在周知されている古墳の多くは後期古墳であり、前・中期に遡る古墳はほとんど認められない。国分寺北東の平野部に単独で立地する慈野塚村古墳(23)は、淡路島では唯一の陶棺が確認されており、淡路国分寺跡(28)・国分尼寺跡(27)と同じ養宜郷内の推定南海道沿いの立地が注目される。

飛鳥・奈良・平安時代

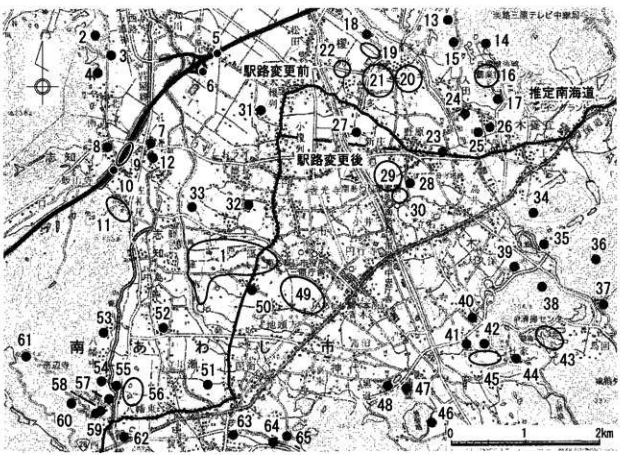
淡路島においても須恵器生産が開始される。汁谷窯跡(47)は７世紀中頃前後に開窯された現在淡路島

最古の窯であるが、後期の古墳群が分布することから汁谷窯跡を遡る窯が存在する可能性は高い。

奈良時代の淡路国分寺跡・国分尼寺跡に先行する寺院として、重弧文軒平瓦が採集された戒壇寺跡(25)が志筑廃寺（淡路市）と並ぶ島内最古級の寺院跡と考えられる。平成22年度の下水道敷設に伴う発掘調査でも国分寺と同時期の軒丸瓦が出土し、近辺に寺院の包蔵はより確実となった。淡路国分寺跡や国分尼寺跡に瓦を供給した瓦窯として、淡路国分寺瓦窯（国分遺跡）(29)や佐保谷瓦窯跡(39)が確認されている。

大野駅家（洲本市）を経て三原平野に至る南海道については、現在の県道三原西淡線がその路線を踏襲しつつ、国分寺跡付近で北西に進路を取り、神本駅家推定地である幡多遺跡野水地区に至るものと思われる。神護景雲２（768）年の神本駅家廃止後は、国分尼寺跡の北側を通っていた道が南側に移動してそのまま西行し、屯倉があったと言われる榎列大榎列地区に至ったと考えられる。そこから南下する現県道五色津名三原線沿線には、古代寺院である山惣廃寺跡(50)や国衙廃寺跡(51)が立地し、南海道は県道を踏襲する行程が推定される。

三原平野西部の河川沿いに立地する嫁ヶ洞遺跡・大野遺跡・岸ノ上遺跡(57)では官衙的な遺物と大型



1 木戸原遺跡
2 大榎遺跡
3 片山遺跡
4 皮甲塚古墳
5 鴨遺遺跡
6 志知川沖田東遺跡
7 辻ノ内遺跡
8 ハバ古墳
9 鈴田遺跡
10 谷町新遺跡
11 佐礼尾古墳群
12 志知城跡
13 長田山古墳群
14 由ケ谷古墳
15 宮田古墳
16 上田山古墳群
17 上八木古墳
18 幡多遺跡下内田地区
19 幡多遺跡行当地地区
20 幡多遺跡若宮地区
21 幡多遺跡野水地区
22 おのころ島遺跡
23 榎野塚村古墳
24 鴨原遺跡
25 戒壇寺跡
26 養宜館跡
27 淡路国分尼寺跡
28 淡路国分寺跡
29 国分遺跡
30 桜ヶ地遺跡
31 高木城跡
32 陸出屋敷館跡
33 円座遺跡
34 釣山城跡
35 安国寺跡
36 柿の木谷城跡
37 成相寺跡
38 上田城跡
39 佐保谷瓦窯跡
40 外かち遺跡
41 上田土居城跡
42 武藤遺跡
43 沢郎池遺跡
44 鹿草遺跡
45 鳥飼手遺跡
46 浦幾池遺跡
47 汁谷窯跡
48 善来遺跡
49 立石遺跡
50 山惣廃寺跡
51 国衙廃寺跡
52 嫁ヶ洞遺跡
53 西山北古墳
54 西山南古墳
55 西山南殿土井館跡
56 大野遺跡
57 岸ノ上遺跡
58 鎮国寺東遺跡
59 鎮国寺跡
60 城が丸城跡
61 西山遺跡
62 平松遺跡
63 上久保遺跡
64 小山古墳
65 鎮原遺跡

図３　周辺の主な遺跡

掘立柱建物や倉庫群が確認された。これらの遺跡では製塩土器が多量に出土していることから、河川を利用して海岸部で生産した塩や物資を集散していた施設と推察できる。製塩土器は雨流遺跡・谷町筋遺跡・国分遺跡など内陸部の遺跡から多く出土している。

中世

平安時代の終わりから中世にかけて、遺跡は急激に増加するとともに平野東部へ広がりをみせることから、各河川の中・上流域の開発が始まった結果、徐々に集落が形成されていったと考えられる。集落遺跡としては、武士階級の建物が確認された大畑遺跡(2)、谷町筋遺跡・おのころ島遺跡・幡多遺跡（若宮地区）・桜ヶ地遺跡(30)・国分遺跡・上久保遺跡(63)、三原川の上流には外かち遺跡(40)・海棠子遺跡・戎添遺跡(42)などがある。

また、守護細川氏の居館であった養宜館跡(26)を中心に高木城跡(31)・階出屋敷館跡(32)・上田土居城跡(41)・西山南殿土井館跡(55)など土塁や堀など小規模な防御施設を伴う城館と、その周辺の丘陵や山地上に前山城跡(34)・柿の木谷城跡(36)・上田城跡(38)・中の子城跡・古城山城跡・城が丸城跡(60)などの出城が配備される。

さらに安国寺跡(35)・成相寺跡(37)・護国寺跡(59)など寺院も増加し、その周辺には護国寺東遺跡や唐草遺跡(44)など寺院関連遺跡も認められる。

近世

安土桃山時代から近世には、天正13（1585）年に淡路国人の野口氏の居城であった志知城跡(12)に豊臣秀吉の四国攻めの先鋒として黒田孝高が入城し、その後加藤嘉明が城主となり淡路の水軍の拠点として機能していた。慶長6（1601）年に志知城の石塁を運び出し、三原川河口に叶堂城が築城されたと言われている。

慶長19（1614）年大坂冬の陣ののち、淡路島は阿波蜂須賀藩の所領となり、政治の中心は洲本に移る。

（参考文献）

『国分遺跡』　2004　三原町教育委員会

第３章　調査内容

第１節　遺跡概略

木戸原遺跡は南あわじ市志知中島・市新・市三條に広がる遺跡である。圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査で新規に発見された。広大な田園地域で大規模な遺跡が新たに発見されたのは平成８年の幡多遺跡をはじめとして、九蔵遺跡・神子曽遺跡以来のことである。

分布調査の結果では事業対象地内全域に遺物は散布しているものの、採集量は少ないため、遺跡範囲確認調査を行っても小規模な範囲の遺跡発見でとどまるであろうと推測していた。しかし、遺跡範囲確

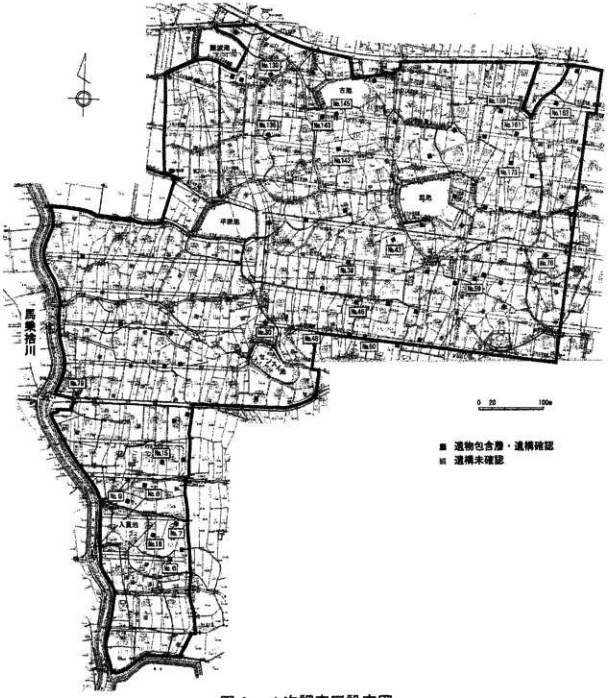


図４　１次調査区設定図

認調査を実施した結果、１次調査対象地ほぼ全域に遺跡の包蔵が確認された。しかもそれまでの発掘調査ではあまり確認されていなかった古墳時代の遺構も含まれていた。南あわじ市は三毛作が基本であるため休耕期間がほとんどなく、発掘調査は本体工事と同時に行うことが多い。そのため、工事直前に大幅な設計変更や工事の遅延が生じ、各方面に多大なご迷惑をおかけすることとなった。

第２節　１次調査（遺跡範囲確認調査）（図４～８　図版３～５・11～15）

１・２工区に伴う遺跡範囲確認調査である。調査対象地内には小規模の谷が幾筋も埋没しており、それを堰き止める形で溜池が多く点在する。それらの間にある微高地上に弥生時代中期から中世にかけての遺構・遺物を確認した。

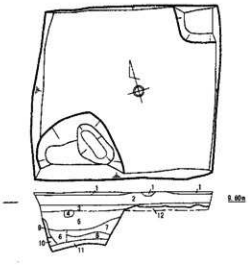
弥生時代の遺構としては調査対象地中央南部にある皿池とセンスイ池にかけての緩やかな微高地上を中心に展開していた（№30・38・46・48・50・142）と考えられる。明確な生活遺構はなく、遺構からの遺物の出土も少なく、ほとんどが遺物包含層からである。また、馬乗捨川近辺と調査対象地北部の谷部に土器の出土が集中しており、北に立地する円座遺跡との関連が考えられた。特に№130では湿地帯状の土壌に須恵器・土師器と共に非常に多くの弥生土器を含んでおり、近辺に生活遺構の存在を窺わせた。５は口縁外面にタタキ目が残存し、横ナデは観られない。体部はタタキ目を下半はハケ調整で消しているが、上半は痕跡がよく残存している。

古墳時代は№143・145付近を中心に調査対象地北部で遺構・遺物を確認した。№145では焼土・炭化物を多く含む土壌に覆われたフラットな面を確認し、竪穴住居の可能性が考えられた。また、№59では地山である淡黄色粘砂質土のほぼ直上より勾玉（４）が出土した。材質は碧玉で重さ5.5ｇ、長さ3.0cm、孔径0.3cmを測る。片側穿孔であることから古墳時代前半頃と考えられる。遺構は溝状と小土坑を確認したが、出土遺物は小片で時期判定は困難である。№135では弥生時代中期の遺物包含層を切り込んだ溝状遺構より古墳時代前半の韓式系土器（12）が出土した。

古代の遺構は、№６より№15周辺まで調査対象地の南側でみられる。№７・18では直径約１ｍを測る土坑をそれぞれ確認し、遺構最上層より須恵器壺（１）が出土した。№７で検出した２基の土坑は同一建物を構成する柱穴である可能性が高く、１間が約2.4ｍと広く柱穴も大型であることから、大型の掘立柱建物と推測される。№９では古代の遺物を含む方形土坑の一部を確認した。

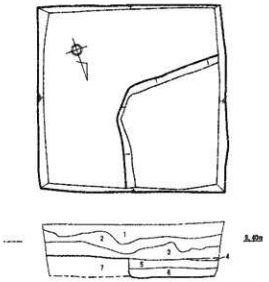
中世は、№173の遺物包含層より青磁鎬蓮弁文碗（18）の破片が出土している。鎬はまだ明瞭であり、13世紀代と思われる。また、出土した羽釜の鍔の部分がほとんど退化していることからも同時期と考えられる。№161からは15世紀代と思われる備前焼壺の破片も出土している。南あわじ市内では15～16世紀の備前焼すり鉢の出土率が高く、物流範囲の広さをうかがわせる。

No. 7



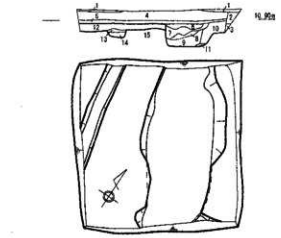
1. 耕作土
2. 淡灰淡黄色極細砂質土(Mn含む)
3. 褐灰色粘砂質土(Mn含む)
4. 淡灰色粘砂質土
5. 黒褐色粘質土(遺物含む)
6. 5層＋淡灰色粘質土
7. 灰色粘質土(Mn含む)
8. 灰色粘質土
9. 5層＋8層＋12層
10. 5層ブロック
11. 濃灰色粘土(遺物含む)
12. 明黄土色粘土

No. 9



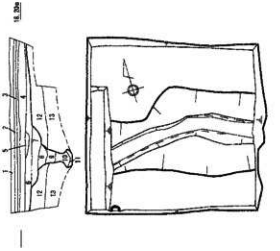
1. 淡灰淡黄色粘質土
2. 黄色粘砂質土(Mn含む)
3. 淡灰色極細砂質土(Mn含む)
4. 褐黒色粘砂質土(炭・Mn含む)
5. 褐灰色粘砂質土(Mn・遺物・φ5cm以下礫・腐り礫含む)
6. 黒褐色粘砂質土(Mn・遺物・φ5cm以下礫含む)
7. 礫混淡褐灰色細砂質土(φ5cm以下礫・腐り礫含む)

No. 30



1. 耕作土
2. 15層＋4層＋5層
3. 礫
4. 淡灰褐色砂質土(Mn含む)
5. 淡灰淡褐色砂質土
(Mn多く・遺物含む)
6. 褐灰色粘砂質土＋15層
(Mn・遺物含む)
7. 灰褐色粘砂質土(Mn・遺物含む)
8. 7層＋15層
9. 灰黒色粘質土(遺物含む)
10. 淡黄色粘土
＋淡灰色粘砂質土(Mn含む)
11. 淡灰褐黄色細砂
12. 褐灰色粘質土(Mn多く含む)
13. 淡黄色粘質土(Mn含む)
14. 淡灰色粘質土(Mn含む)
15. 明黄色粘土(Fe・Mn含む)

No. 38

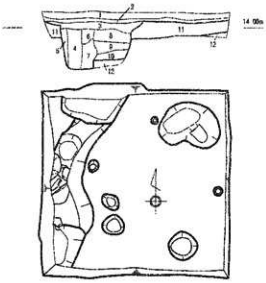


1. 淡灰淡褐色粘質土(Mn含む)
2. 淡褐淡灰色極細砂質土
(Mnまばらに含む)
3. 淡灰褐黄色粘砂質土(Mn含む)
4. 褐灰色粘砂質土(Mn・遺物・
φ5cm以下腐り礫まばらに含む)
5. 灰色極細砂質土(遺物含む)
6. 淡灰色粘砂質土(Mn含む)
7. 淡灰色粘質土(Fe・Mn含む)
8. 淡暗灰色粘質土(Fe含む)
9. 灰色粘質土(Fe含む)
10. 黒褐色粘土
11. 灰色粘質細砂
12. 黄色粘質土(Mn含む)
13. 明黄色粘土(Mn多く含む)

0 1m

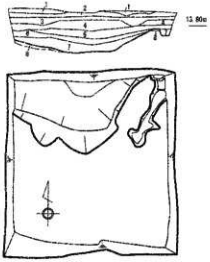
図5　1次調査　平面・層序図1

No. 43



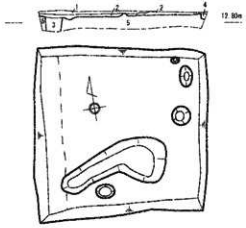
1. 褐灰色砂質土
2. 淡褐淡黄色砂質土(遺物含む)
3. 褐色粘砂質土
4. 褐色粘砂質土(φ5cm以下炭り礫まばらに含む)
5. 黒灰色粘砂質土(Mnまばらに・遺物含む)
6. 褐灰色粘砂質土(Mn含む)
7. 褐灰色粘砂質土＋12層ハブロック混じる(Mnまばらに含む)
8. 褐灰色粘砂質土＋12層ハブロック混じる(Mn・遺物含む)
9. 6層＋12層ブロック(Mnまばらに・φ5cm以下礫わずかに含む)
10. 12層に4層ブロック混じる
11. 黒褐色粘質土(Mnまばらに・遺物含む)
12. 緑混黄色粘質土(Mn・φ10cm以下礫・焼り礫含む)

No. 46



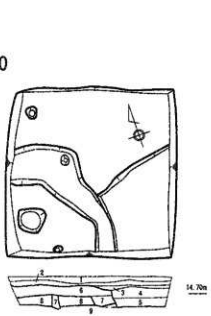
1. 耕作土
2. 褐色粘質土(Fe・Mn含む)
3. 灰褐色粘砂質土(Mn含む)
4. 褐灰色粘砂質土(Mn・遺物多く含む)
5. 淡褐灰色粘砂質土＋黄色磯稀砂混じる (Mnまばらに含む)
6. 褐灰色粘砂質土(Mnまばらに含む)
7. 6層＋8層
8. 淡黄色粘砂質土(Mn・φ5cm以下炭り礫まばらに含む)

No. 48



1. 耕作土
2. 淡灰褐色砂質土(Mnまばらに含む)
3. 縄痕
4. 緑混黄淡褐色粘砂質土(遺物・φ5cm以下礫・炭り礫含む)
5. 緑混淡灰黄色粘質土(Mn・φ10cm以下礫・炭り礫含む)

No. 50

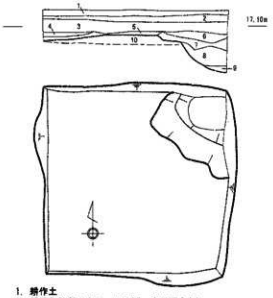


1. 耕作土
2. 淡灰淡橙色砂質土(φ3cm以下炭り礫まばらに含む)
3. 淡褐色粘砂質土(Mn・φ3cm以下炭り礫わずかに含む)
4. 淡褐灰色粘砂質土(Mn・遺物含む)
5. 淡褐灰灰色粘砂質土(Mn含む)
6. 黒褐色粘質土(遺物含む)
7. 褐黒色粘質土
8. 淡暗褐色粘質土
9. 淡黄色粘砂質土(Mn多く含む)

0 1m

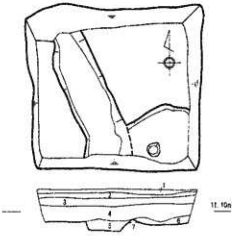
図6　1次調査　平面・層序図2

No. 76



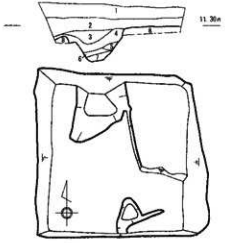
1. 耕作土
2. 褐灰色粘質土(φ3cm以下礫・腐り礫含む)
3. 淡灰褐色粘質土(φ5cm以下礫・腐り礫含む)
4. 褐灰色粘質土(φ5cm以下礫・腐り礫含む)
5. 褐黒色粘質土
6. 黒灰色～淡黄色シルト質土(φ3cm以下腐り礫まばらに含む)
7. 灰黒色～淡黄色シルト質土(φ3cm以下腐り礫まばらに含む)
8. 褐灰色シルト質土
9. 褐灰色シルト質土(Mn多く含む)
10. 淡灰淡黄色シルト質土

No. 143



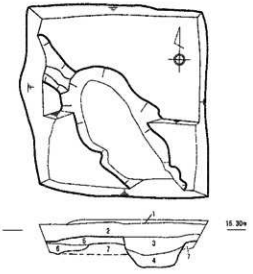
1. 耕作土
2. 黄褐色シルト質土
3. 淡褐灰色土
4. 淡灰黄色褐色斑点混入土(遺物含む)
5. 淡灰黄色褐色斑点混入土
6. 灰黄色褐色斑点混入土
7. 黄色粘質土

No. 145



1. 黄褐色土
2. 灰色褐色斑点混入土(遺物含む)
3. 灰茶色土
4. 2層＋焼土＋炭化物
5. 6層2次堆積
6. 褐灰色土
7. 淡褐灰色土
8. 黄色粘質土

No. 159



1. 耕作土
2. 黄褐灰色土
3. 灰茶色土＋7層小ブロックわずかに含む
4. 灰茶色土＋7層ブロック多く含む
5. 灰黄色土
6. 灰橙色シルト質土
7. 黄白灰色褐色斑点混入粘質土

0　1m

図７　１次調査　平面・層序図３

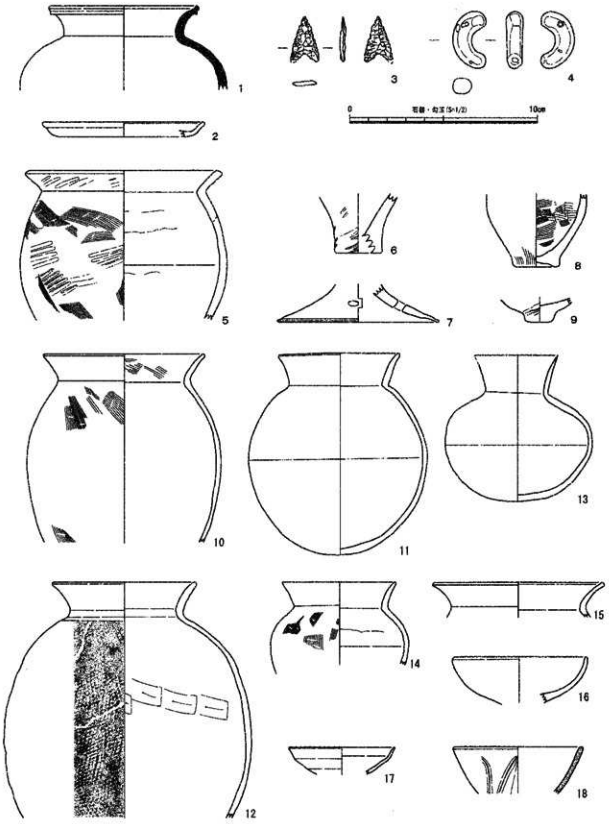


図８　1次調査　出土遺物

1．No.7　2．No.9　3．No.38　4．No.59　5～9．No.130　10～12．No.135　13・14．No.143　15・16．No.145
17．No.162　18．No.173

第３節　２次調査

工事施工によって遺跡に影響のある部分を１～６区と設定し、調査を行った。

１．１区概要（図９・10　図版６）

水路予定地で調査面積は107㎡である。遺物包含層から須恵器・陶器片が出土しているが、小片であるため時代は不明である。

１）溝

遺構１

調査区南端部で東西方向に検出した。確認調査№79で確認した溝の続きである。幅1.2m、深さ６～10cmを測る。耕作土直下より掘り込まれている。埋土は暗灰黄色砂質土（４・５層）である。

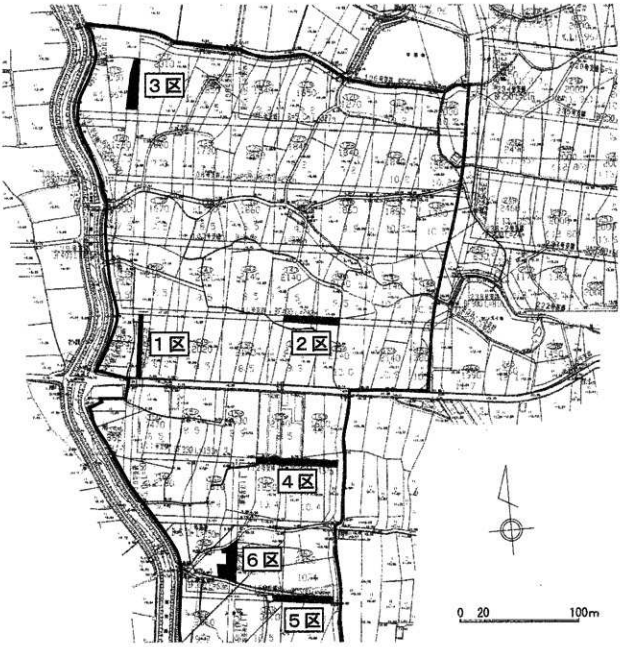


図９　２次調査区設定図

出土遺物はない。

遺構２

調査区中央部で東西方向に検出した。幅9.8m、深さ70cm以上を測る。埋土は上層が褐灰色土～礫混灰黄褐色砂質土（11～13層）、下層が黄灰色砂礫（14層）である。出土遺物はない。

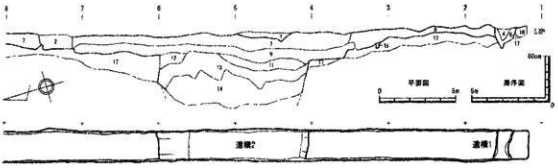


図10　１区　平面・層序図

２．２区概要（図９・11・12　図版６・15）

水路予定地で調査面積は90㎡である。遺物包含層からは８世紀代の須恵器坏蓋・埦（19～21）、硬質に焼き締まったコップ型のイイダコ壺（22）や製塩土器片（丸底Ⅲ式）が少量出土している。

１）掘立柱建物

建物１（図13）

調査区中央西よりで方形の柱穴を検出した。梁行２（1.9m）×桁行１間以上であり、主軸はN28° Eである。幅２mの調査区のため、全体像は不明であるが、東端の柱穴がほかよりも小さく浅いことから、軒支柱と考えられる。埋土は暗灰黄色細砂質土に地山である明黄褐色粘質土（13層）のブロックが混入する。図化はできていないが、柱穴より８世紀代の須恵器・土師器が出土している。

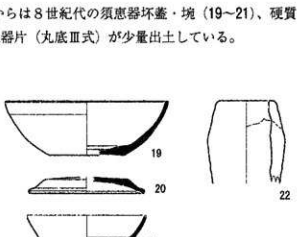


図11　２区　遺物包含層出土遺物

３．３区概要（図９・14　図版７）

貯水池予定地で調査面積は343㎡である。出土土器は少片で、図化できるものはない。

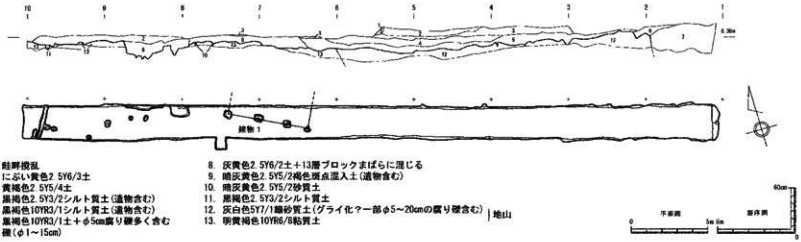


図12　２区　平面・層序図

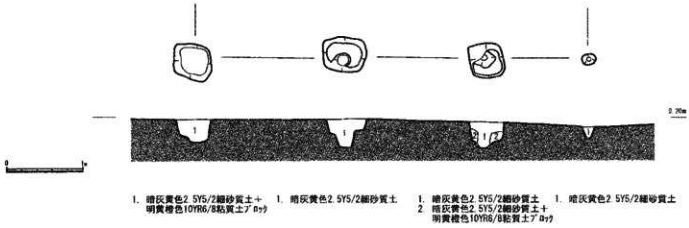


図13　２区　建物１　平面・層序図

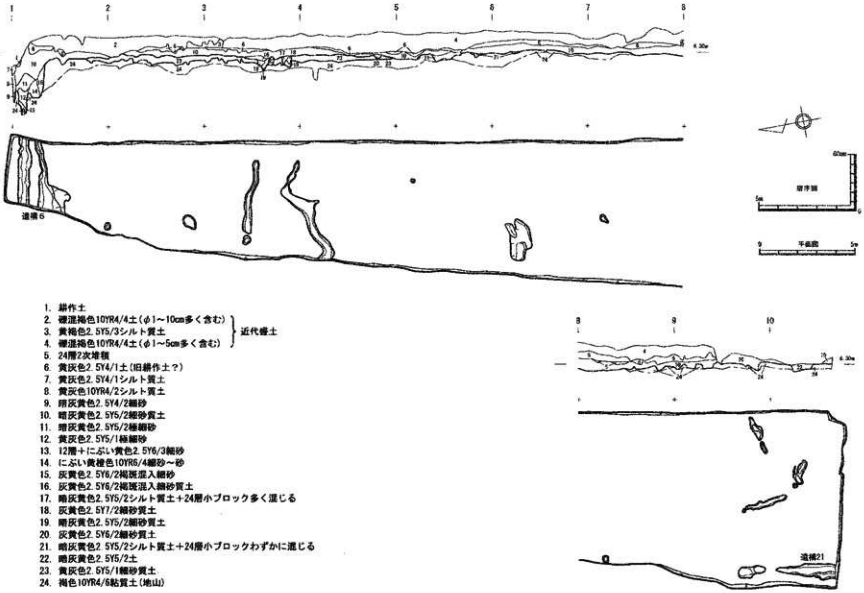

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
6.30m
道場5
道場21
層序図
平面図
1. 耕作土
2. 褐混褐色10YR4/4土(φ1～10cm多く含む)
3. 黄褐色2.5Y5/3シルト質土
4. 褐混褐色10YR4/4土(φ1～5cm多く含む)
近代盛土
5. 24層2次堆積
6. 黄灰色2.5Y4/1土(旧耕作土?)
7. 黄灰色2.5Y4/1シルト質土
8. 黄灰色10YR4/2シルト質土
9. 暗灰黄色2.5Y4/2細砂
10. 暗灰黄色2.5Y5/2細砂質土
11. 暗灰黄色2.5Y5/2極細砂
12. 黄灰色2.5Y5/1極細砂
13. 12層+にぶい黄色2.5Y6/3細砂
14. にぶい黄橙色10YR6/4細砂～砂
15. 灰黄色2.5Y6/2褐斑混入細砂
16. 灰黄色2.5Y6/2褐斑混入細砂質土
17. 暗灰黄色2.5Y5/2シルト質土+24層小ブロック多く混じる
18. 灰黄色2.5Y7/2細砂質土
19. 暗灰黄色2.5Y5/2細砂質土
20. 灰黄色2.5Y6/2細砂質土
21. 暗灰黄色2.5Y5/2シルト質土+24層小ブロックわずかに混じる
22. 暗灰黄色2.5Y5/2土
23. 黄灰色2.5Y5/1細砂質土
24. 褐色10YR4/6粘質土(地山)

図14　3区　平面・層序図

1）溝

遺構５

調査区北端部で東西方向に検出した。長さ3.5m、幅55cm、深さ27cmを測る。埋土は上層が暗灰黄色極細砂（11層）、下層はにぶい黄色細砂（13層）が堆積しており、流水が認められた。遺物は中世と思われる土師質土器片が１点出土したのみである。

遺構21

土師質土器や瓦器片などの中世遺物が出土した。遺構５・21ともに既存の畦畔とほぼ同一方向で確認された遺構であることから、中世には田畑が広がっていた可能性が考えられる。

４．４区概要（図９）

幅２m×延長68mの水路予定地の調査区で、面積は134㎡である。調査区周辺の確認調査結果では、南側は不安定な土層であったものの、北側は安定した黄色系粘質土上面で遺構を確認したため、本発掘調査対象とした。機械掘削の結果、４区は砂礫～礫といった不安定な土壌で、北側で確認した黄色系粘質土は検出されなかった。また調査区が数筆の圃場の境界と重なっていたため、コンクリート畦畔の造成による攪乱を広範囲に受けていた。遺構は未確認で、遺物は僅かに土師器が表土直下の床土から出土している。

５．５区概要（図９・15・19　図版７～９・16）

入貫池の東に位置し、木戸原遺跡では最も南端にあたる水路部分の調査区で、幅２m×延長41.5m、調査面積は83㎡である。遺構は黄褐色粘土（65層）と明黄褐色粘土（66層）上面で検出し、溝や土坑・柱穴などを確認したが、調査区が狭いため遺構の性格など不明な点が多い。包含層である21層には須恵器（23～26）や土師器・製塩土器など古代の遺物が含まれていた。

1）溝

遺構５（図版８）

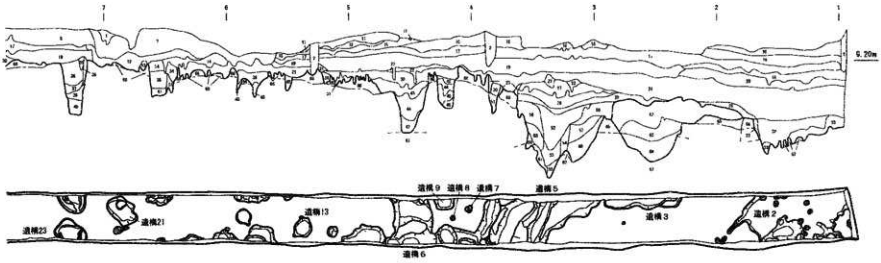
調査区の西半に位置し、南西から北東方向に向う溝である。調査区外へと続き、遺構３と重複している。幅2.2mで深さは64cmである。この溝は南壁の断面観察から一度埋没したあとに掘り直された（52～55層）と考えられる。土師器がわずかに出土しているが小片のため図化はできない。

2）土坑

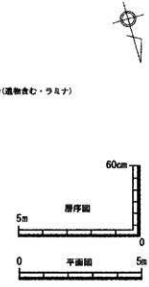
調査区が狭く判断が難しいため、柱穴や落ち込み状の遺構も含める。

遺構２（図19　図版８・16・17）

調査区の西端に位置し、底面は不整形な凸凹であることから自然の落ち込み状の遺構である。遺構面となる黄褐色系粘土（65・66層）は、西に行くほど薄くなり、遺構２周辺では遺構埋土を10cmほど掘削すると青灰色粘土（67層）が現れる。遺構埋土は褐灰色シルト質土～暗灰黄色細砂（32層）・黒褐色粘質土（33層）である。遺構から７世紀後半～８世紀前半の土師器・須恵器・製塩土器が出土している。土師器坏（27）は復元口径16.6cm、器高3.2cmである。平底から体部は内湾し、口縁部は外反して端部の内側に一条の沈線がめぐる。内外面とも剥離のため調整は不明である。甕（28）は口径16.0cmで、長胴化した体部からやや直線的な口縁部が外傾し、端部を丸くおさめる。外面体部はハケメ、内面はナデである。須恵器の甕（29）は復元口径32.2cmである。30・31は埦形の製塩土器で、30は内湾しながら外上方に口縁が伸び、胎土に籾殻の混入が目立ち、復元口径は12.8cmである。31は平底で口径10.3cm、底径5.8cm、器高5.5cmである。



1. 耕作土
2. 暗褐・撹乱
3. 灰黄褐色10YR4/2砂質土
4. にぶい黄褐色10YR5/2.5細砂質土
5. 褐灰色10YR5/1粘細砂質土
6. 黄灰色2.5Y5/1シルト
7. 66層+21層+25層+34層
8. 灰黄褐色10YR5/2細砂質土
9. 66層+17層
10. にぶい黄褐色10YR5/3砂質土
11. 暗灰黄色2.5Y4.5/2 砂質土
12. にぶい黄褐色10YR5/3極細砂
13. 66層+14層+25層
14. にぶい黄褐色10YR5/3砂質土
15. にぶい黄褐色10YR5/3砂質土(8m含む)
16. 灰黄褐色10YR5/2極細砂質土
17. 灰黄褐色10YR4/2粘砂質土(8m・遺物含む)
18. にぶい黄橙色10YR6/3細砂(遺物含む)
19. 18層+20層
20. 灰黄褐色10YR4.5/2粘砂質土+18層わずかに混じる
21. 灰黄褐色10YR3.5/2粘砂質土(8m・遺物含む)
22. 灰黄褐色10YR4/2粘砂質土
23. 21層+27層
24. 黒褐色10YR2/2粘砂質土(8m多く含む)
25. 灰黄褐色10YR5/2粘砂質土(8m多く・遺物含む)
26. 黒褐色10YR2/2粘質土
27. 暗灰黄色2.5Y5/2極細砂質土
28. 暗褐色10YR3.5/3粘質土
29. 褐褐褐色7.5YR2/3粘砂質土～黒褐色10YR2/3粘質土
30. 黒褐色10YR3/1粘質土
31. 灰黄褐色10YR4/2粘質土
32. 暗灰色10YR4/1シルト質土～暗灰黄色2.5Y5/2細砂(遺物含む)
33. 黒褐色2.5Y3/1粘質土(遺物含む)
34. 褐灰色10YR4/2粘砂質土
35. 黒褐色10YR3/2粘質土
36. 黒褐色10YR3/1粘質土
37. 黒褐色10YR2.5/1粘質土
38. 黒褐色10YR3/2粘質土(8m含む)
39. 66層+灰黄褐色10YR4/2粘砂質土
40. 褐灰色10YR4/1粘質土+66層
41. 36層+66層ブロックわずかに混じる(遺物含む)
42. 黒褐色10YR3/2.5粘質土
43. 黒褐色10YR3/2.5粘質土+にぶい黄色2.5Y5.5/3細砂(遺物含む・ラミナ)
44. 66層+褐灰色10YR4/1.5粘質土
45. 褐灰色10YR4/1シルト質粘土
46. 黒褐色10YR3/1シルト質土
47. 66層+67層+黄灰色2.5Y5/1シルト
48. 黒色10YR2.5/1粘質シルト
49. 黒褐色10YR3.5/1シルト質粘土
50. 褐灰色10YR4/1.5粘質土
51. 黒褐色10YR3.5/1粘質土
52. 黒色N2/0粘土
53. 黒色N2.5/0粘土
54. 黒褐色2.5Y3.5/1粘土
55. 黒色2.5Y2.5/1粘土+67層
56. 黒褐色10YR3/1.5粘質土
57. 褐灰色10YR4/1.5粘質土
58. 黒褐色2.5Y3.5/1粘質土
59. 黒色2.5Y2.5/1粘質土
60. 灰色5Y4/1粘土+65層+67層
61. 55層と似
62. 褐色10YR4/4粘質土(8m多く含む)
63. 黒色10YR2/1粘質土
64. 黒色10YR2/1粘土
65. 黄褐色10YR5/6粘土(8m多く含む・地山)
66. 明黄褐色10YR6.5/6粘土(地山)
67. 青灰色5B6/1粘土(地山)



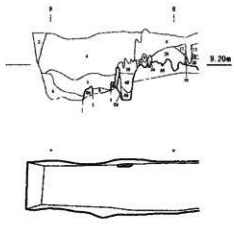


図15　5区　平面・層序図

遺構３

調査区の西部、南壁ぎわで部分的に検出した。大半は調査区の南側へと広がるため全容は不明である。南壁の断面観察から遺構３は遺構５に切られている。遺物は出土していない。

遺構６（図19　図版17）

調査区中央やや西寄りに位置し、遺構７～９を囲むようなコの字状に検出をしている。床面は隆起があることから、複数の遺構が重複している可能性もあるが、検出時にはその判別はできなかった。東側の南壁際が最も深く46cmを測る。遺物は土師器が出土している。甕（32）は復元口径17.5cmで、搬入品の可能性がある。

遺構９（図版８）

調査区中央やや西寄りに位置し、南半部は調査区外へと続く。現状の規模では幅0.8mで深さは南壁断面でみると28cmである。埋土の中層に地山の２次堆積層が確認できる。遺物は土師器が出土しているが小片のため図化はできない。

遺構13（図16）

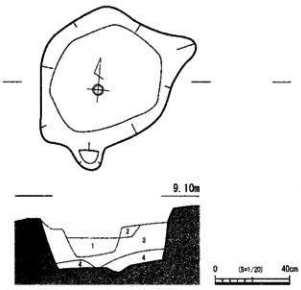
中央部に位置し、長径0.8m、短径0.7mの完存する遺構である。柱痕を確認したことから柱穴と考えられる。上層から土師器が出土しているが小片のため図化はできない。

遺構21（図17）

調査区の東部に位置する遺構で、長辺1.3m、短辺0.8mを測り、深さは40cmである。遺構中央には柱痕が残る。

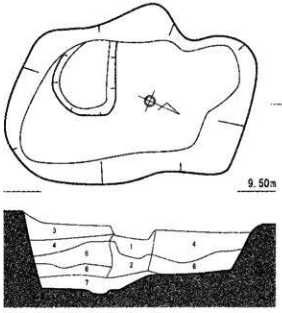
遺構23（図18・19　図版９・18）

調査区の東部に位置する遺構で、上層は現代の攪乱の影響を受けている。推定長径1.3m、短径0.9mを測る。甕（33）は口径14.0cmで、丸底から内湾し、頸部から外方にのびる直線的な口縁がつく。体部



1. 黒褐色2.5Y3/1シルト質土
2. 暗灰黄色2.5Y4/2シルト質土
3. オリーブ褐色2.5Y4/3シルト質土
4. 黒褐色2.5Y3/2シルト質土

図16　５区　遺構13 平面・層序図



1. 地山　2次堆積
2. 5層＋地山ブロック多く混じる
3. 黒褐色2.5Y3/1シルト質土
4. 地山　2次堆積
5. 黒褐色2.5Y3/2細砂質土
6. 暗灰黄色2.5Y4/2シルト質土
7. 黒色2.5YZ/1極細砂質土

図17　５区　遺構21　平面・層序図

の最大径は胴部中央と肩部の間にあり、倒卵形で外面は細かいハケメ、内面はヘラケズリである。布留式土器併行期の中でも古い段階にあたり、搬入品の可能性がある。

6．6区概要（図9・20　図版9）

馬乗捨川から50m東に位置する水路と圃場面の調査区である。調査区の西部は馬乗捨川の影響を受けたと考えられる礫を多く含んだ土壌であり、遺構は確認できなかった。よって、生活には適さない場所であったと判断し、当初の予定を変更して調査区西側の礫層部分は遺跡範囲外として調査を縮小し、面積は291㎡となった。北東部では礫混褐灰色砂質土（24層）上面、南東部ではにぶい黄褐色砂質土（25層）上面が遺構面となる。遺構密度は低いが掘立柱建物と竪穴状遺構・溝・土坑・小穴などを検出した。

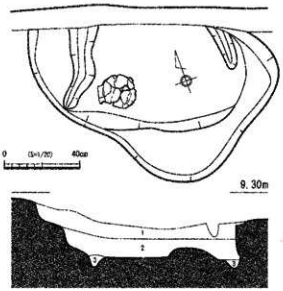
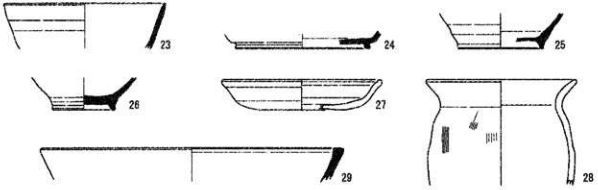


図18　5区　遺構23　平面・層序図



1）掘立柱建物

建物1（図21）

調査区の南東隅に位置する1間（3.8m）以上×2間（5.3m）以上の建物である。東側と南側の調査区外に続く可能性がある。建物の平面形はやや歪で、主軸はN78°Wである。柱穴に柱痕は確認できなかった。埋土はすべて黒褐色粘砂質土で、深さはいずれも20～30cmである。遺物は出土していない。

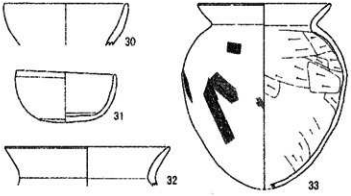
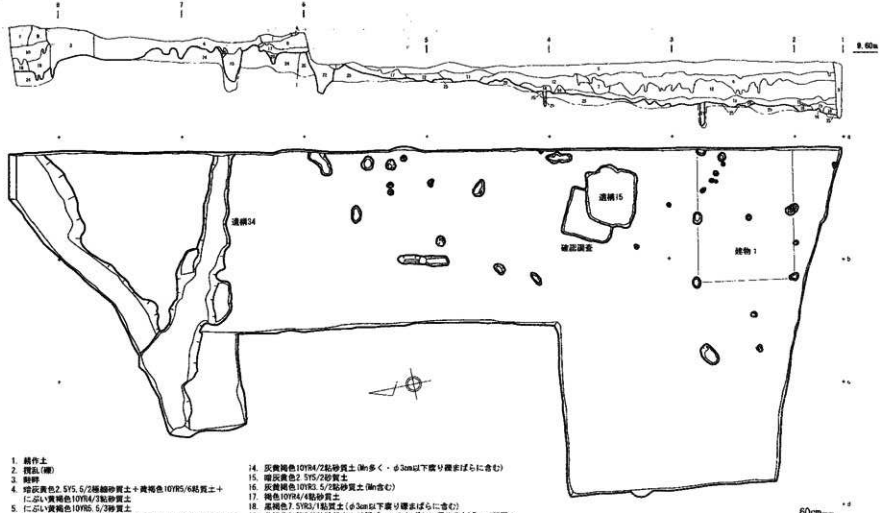


図19　5区　出土遺物



1. 耕作土
2. 撹乱(鐵)
3. 畦畔
4. 暗灰黄色2.5Y5.5/2極細砂質土＋黄褐色10YR5/6粘質土＋にぶい黄褐色10YR4/3粘砂質土
5. にぶい黄褐色10YR6.5/3砂質土
6. にぶい黄褐色10YR4/3粘砂質土(8mまばらに含む)＋7層＋12層
7. 黒褐色10YR3/2粘砂質土(φ3cm以下礫・炭り礫まばらに含む)
8. 褐灰黄色2.5Y5/2砂質土＝黄褐色10YR5/6砂質土
9. 暗灰黄色2.5Y4.5/2砂質土
10. 褐灰色10YR4/1.5細砂質土
11. オリーブ褐色2.5Y4/3粘砂質土
12. 灰黄褐色10YR3.5/2粘極細砂質土(8mまばら・遺物含む)
13. 灰黄褐色10YR4/2粘砂質土(遺物含む)
14. 灰黄褐色10YR4/2粘砂質土(8m多く・φ3cm以下炭り礫まばらに含む)
15. 暗灰黄色2.5Y5/2砂質土
16. 灰黄褐色10YR3.5/2粘砂質土(8m含む)
17. 褐色10YR4/4粘砂質土
18. 黒褐色7.5YR3/1粘質土(φ3cm以下炭り礫まばらに含む)
19. 黄褐色2.5Y5/3粘砂質土＋18層ブロックわずかに混じる(φ5cm以下礫・炭り礫まばらに含む)
20. 黒褐色10YR3/2粘質土(φ3cm以下礫、炭り礫まばら・遺物含む)
21. 黒褐色10YR3.5/2粘砂質土(φ5cm以下炭り礫まばらに含む)
22. 黒褐色10YR3.5/2粘砂質土(8m・φ5cm以下炭り礫まばらに含む)
23. 暗黒黒褐色10YR3/1.5粘砂質土(φ5cm以下礫、炭り礫・遺物含む)
24. 暗黒褐灰色10YR4/1粘砂質土(φ10cm以下礫、炭り礫多く含む)
25. にぶい黄褐色10YR5.5/3砂質土(φ10cm以下礫、炭り礫まばらに含む)

図20　6区　平面・層序図

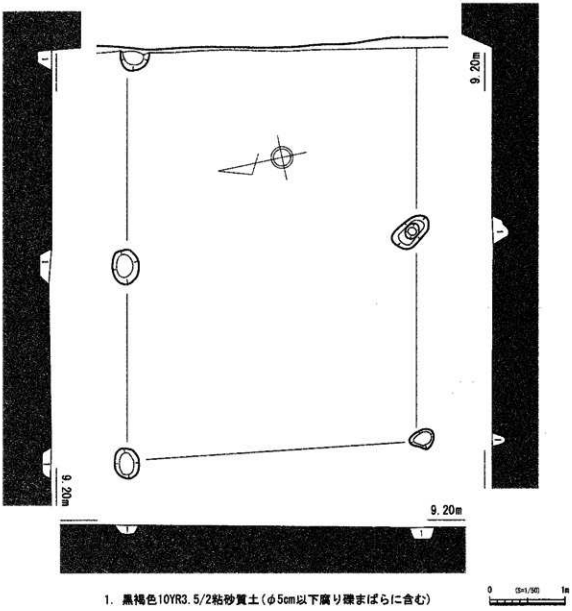
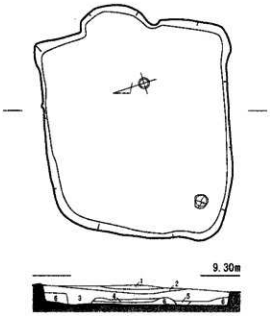


図21　6区　建物1　平面・層序図

2）竪穴状遺構

遺構15（図22・24　図版10・18・19）

建物1から約2.5m北側に位置し、掘立柱建物と主軸を平行にする2.1×2.3mの竪穴状遺構で、東側に0.25mの張り出しを持つ。床面は平坦で深さは約22cm、柱穴は認められない。遺構の北西部分は確認調査時に検出し、埋土の1層には多くの炭が含まれていた。8世紀前半頃の土師器坏（34・35）や須恵器坏蓋（36）が出土している。34は復元口径19.7cmで、内湾する体部から口縁部は外に開く。端部は丸くおさめ、内側に一条の沈線がめぐる。35は遺構の西隅から出土し、口径14.8cm、器高3.6cmである。体部は底部から外傾して直線的に立ち上がる。内面には赤色顔料の痕跡が残る。36は復元口径15.5cmで、天井部は扁平でやや凹んでいる。



1. 黒褐色10YR3/1粘砂質土(Mn・炭化物・遺物含む)
2. 黒褐色10YR3/1粘砂質土
(Mn・遺物・φ1cm以下腐り礫まばらに含む)
3. 黒褐色10YR3/1粘砂質土(Mn・遺物含む)
4. 灰黄褐色10YR4/2砂質土(遺物含む)
5. 灰黄褐色10YR5/2細砂質土(遺物含む)
6. 暗褐色10YR3/3土(遺物含む)

図22　6区　遺構15　平面・層序図

3）溝

遺構34（図23・24　図版10・19・20）

調査区の北部に位置する幅0.8～2.0mの東西方向の溝である。断面形は幅の狭いところでは浅いU字状を、幅の広いところでは皿状を呈し、深さは0.22～0.35mを測る。弥生時代後期末から庄内式土器併行期の土器が多く、上層に僅かに古代の遺物が含まれる。大型の二重口縁壺（37）は口径29.9cmで、頸部には不規則に直径7～9mmの円孔が穿たれる。頸

1. にぶい黄色2.5Y6/4粘砂質土
2. 暗褐黒色10YR2.5/1粘砂質土
(遺物・φ5cm以下礫・腐り礫含む)
3. 黒褐色10YR2/2粘砂質土
(遺物・φ5cm以下礫・腐り礫まばらに含む)
4. 暗褐黒褐色10YR3/1粘砂質土
(φ5cm以下礫・腐り礫多く含む)
5. 暗褐黒褐色2.5Y3/2粘砂質土
(遺物・φ5cm以下礫・腐り礫多く含む)

図23　6区　遺構34　平面・層序図

部と体部の境には断面三角形の貼り付け突帯がめぐる。調整は剥離のため不明である。38～40は壷の底部である。38は底径6.5cmの平底で体部は大きく開く。37の底部とみられ、復元すると器高は62～66cmとなる。39は底径5.3cmの平底で体部は大きく開く。40は底径2.5cmで、内面には板状工具によるナデの痕跡が残る。41～44は甕の底部である。41は底径3.5cmの上げ底で、42は底径4.3cmのややドーナツ状の底である。43は底径3.8cmで内面に板状工具によるナデの痕跡が残る。44は底径4.8cmのややドーナツ状の底である。甕の口縁部（45）は復元口径21.0cmで、内外面ともナデである。高坏の脚柱部（46）の脚柱部は中実である。高坏の坏部～脚柱部（47）は中空で、調整は磨耗のため明瞭に残っていないが、外面はヘラミガキである。有孔鉢（48）は尖底に両側から焼成前穿孔している。体部外面はタタキを施している。

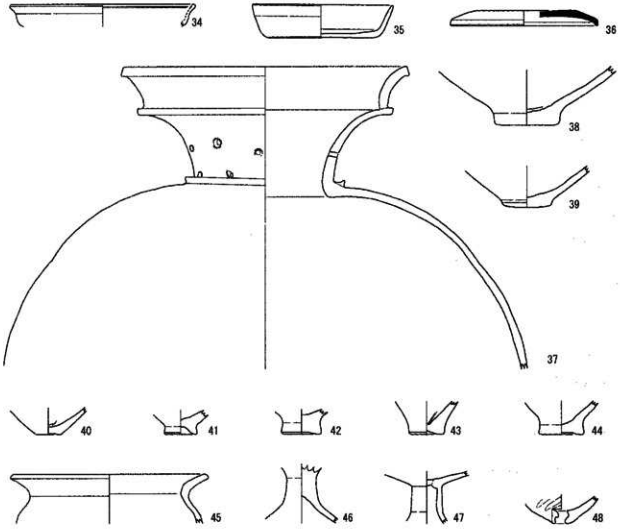


図24　6区　出土遺物

第４章　総括

第１節　弥生時代

１次調査では遺構から遺物の出土はほとんどなく、明確な土器出土は湿地帯を呈していた№130のみであったが、２次調査では６区で後期末から庄内式土器併行期の土器を伴う遺構を確認した。しかし、６区の西部は馬乗捨川の影響を受けたと考えられる礫層であり、３区でも安定した土壌ではあっても馬乗捨川に近接しているためか生活遺構は確認できていない。６区遺構34の遺物は自然の流れ込みとは考えがたく、二重口縁壺（37）は祭祀用土器の可能性があることから、弥生時代の生活区域は馬乗捨川より離れたやや東部に立地しているものと推測する。

第２節　古墳時代

１次調査では調査対象地北部にある古池付近で前半期と思われる生活遺構・遺物を確認した。また№135からは韓式系土器が出土し、渡来人の存在を明確にした。これまでに淡路島内で韓式系土器が確認されたのは、淡路市貴船神社遺跡・南あわじ市幡多遺跡若宮地区・雨流遺跡・嫁ヶ渕遺跡・平松遺跡・西ノ開地遺跡であり、貴船神社遺跡以外はすべて三原平野内に立地している。淡路島最大の平野を有することで、古墳時代以降中心的地域となっていったことは想像に難くない。

本遺跡周辺には古墳が少なく、北西に立地する佐礼尾古墳群は、木戸原遺跡の人々の墓域としてはやや離れた位置となる。そのような状況で№59より勾玉（４）が遺構に伴わない状況で出土し、古墳の破壊が考えられた。周知されている古墳は三原平野の縁辺部に多く、平野内では陶棺が出土した徳野塚村古墳のみである。しかし、陶棺の出土状況もあいまいな点が多いことから、平野内での古墳の立地には疑問が残り、出土した勾玉が古墳由来の遺物と考えるのは慎重を期する。

５区遺構23は底面がフラットなことから、生活遺構の可能性が高い。確認された他の土坑も柱穴の可能性が高いが、調査区の制限で不確実である。また、溝である遺構５は時期判定が可能な遺物は出土していないが、掘り直しがなされていること、この溝から東に遺構が展開することから、なんらかの区画溝の可能性が考えられる。

第３節　奈良・平安時代

掘立柱建物を２区と６区で１棟ずつ確認した。６区の建物１は遺物は出土していないが、遺構15と主軸を同じくすることから８世紀前半頃と考えられる。どちらも一般的な建物と推測する。

南あわじ市ではイイダコ壺の出土は非常に少なく、２区から出土した22は、消費地としては玉造遺跡に次いで２例目となる。

第４節　中世

遺物は包含層から出土しているため、事業対象地周辺に遺構は広がっていると思われるが、２次調査では生活遺構は確認できなかった。

図版1

調査地遠景

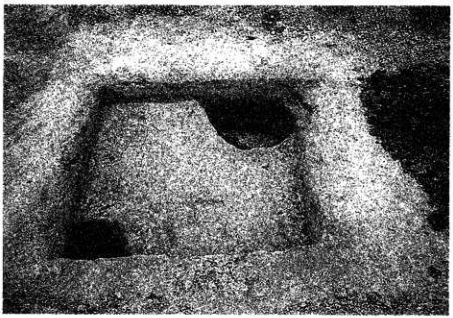
図版2

調査地南部近景
（西より）

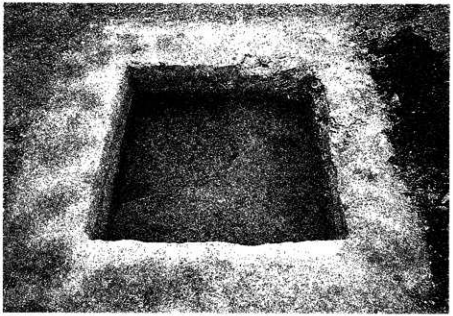
調査地東部近景
（東より）

調査地北部近景
（北より）

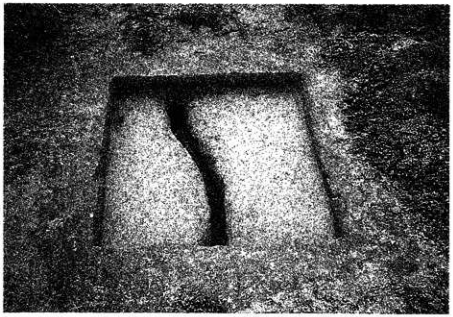
No.7　完掘状況
（北より）



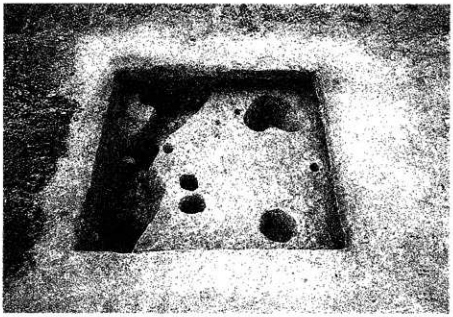
No.9　完掘状況
（北より）



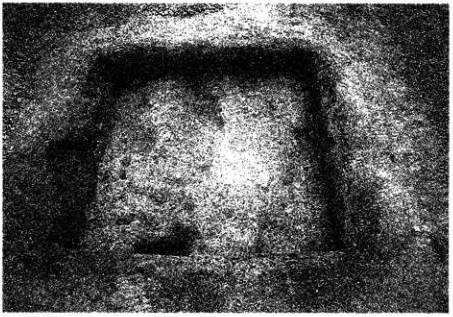
No.38　完掘状況
（東より）



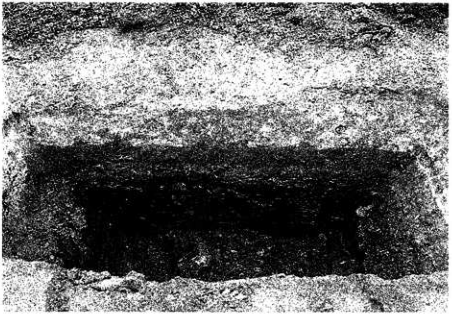
No.43　完掘状況
（南より）



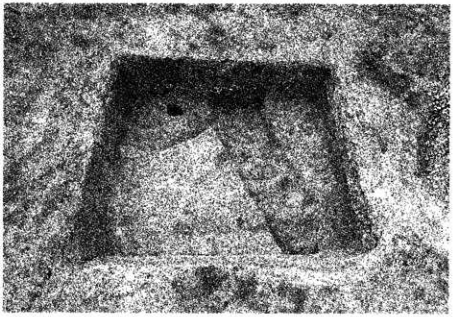
No.59　完掘状況
（北より）



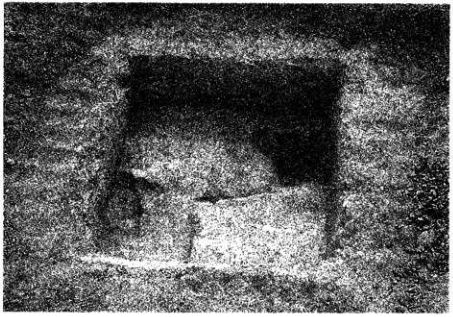
No.130　西壁



No.143　完掘状況
（北より）



No.145　完掘状況
（東より）



No.159　完掘状況
（東より）

1区　完掘状況（南より）

2区　完掘状況
（西より）

図版7

3区　完掘状況
（北より）

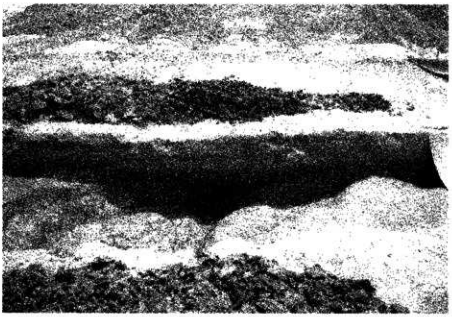
5区　完掘状況
（西より）

5区
中央部完掘状況
（東より）

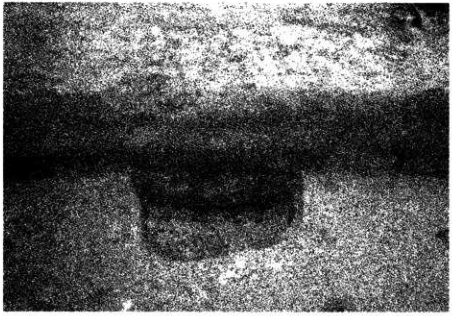
図版8

5区　遺構2
（東より）

5区　遺構5
南壁

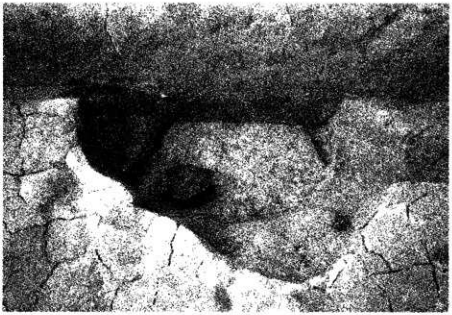


5区　遺構9
南壁



図版9

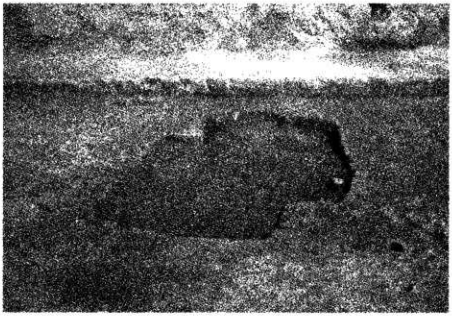
5区　遺構23
遺物出土状況
（南より）



6区　完掘状況
（南より）

6区　完掘状況
（北より）

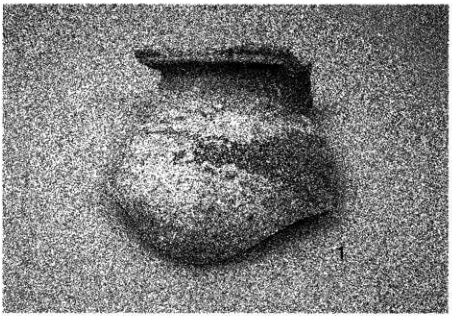
6区　遺構15
完掘状況
（西より）

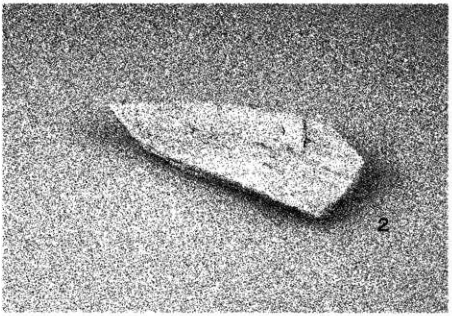


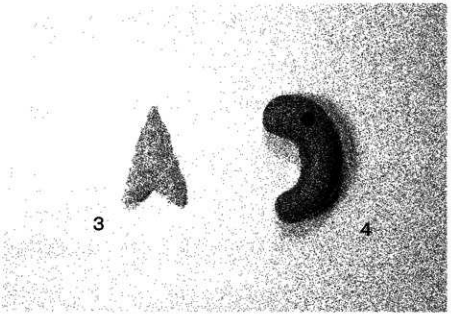
6区　遺構34
完掘状況
（西より）

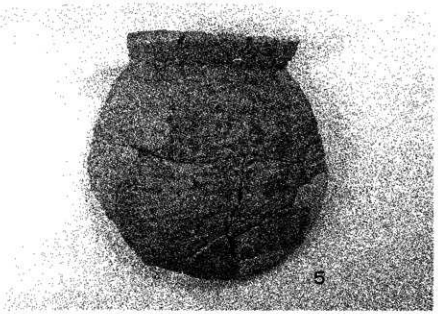
6区　遺構34
遺物出土状況
（東より）

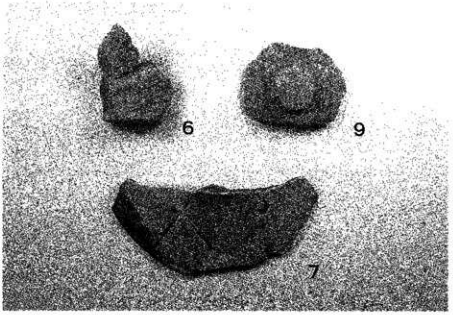
図版11

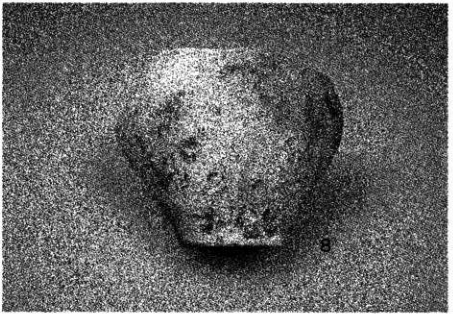




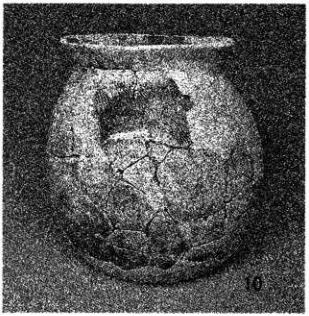


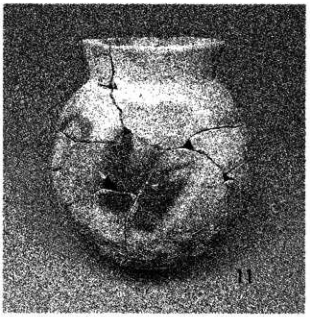

5

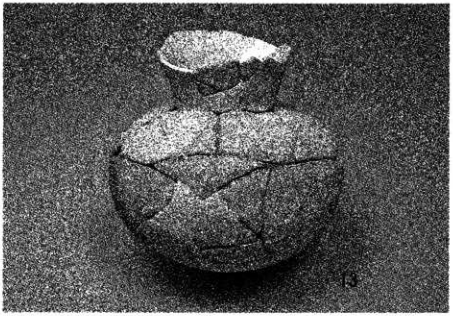

6
9
7


8

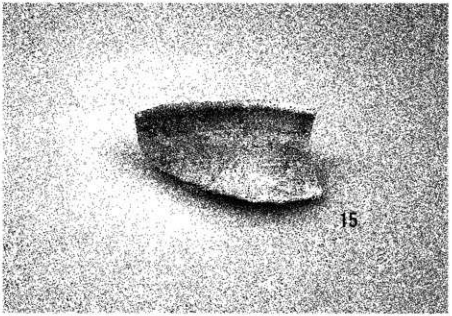
図版13



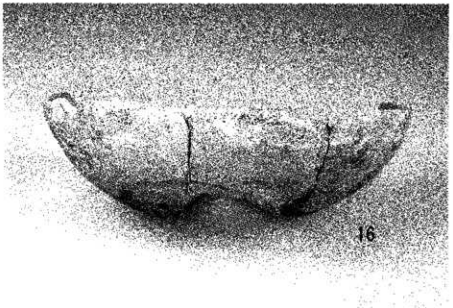


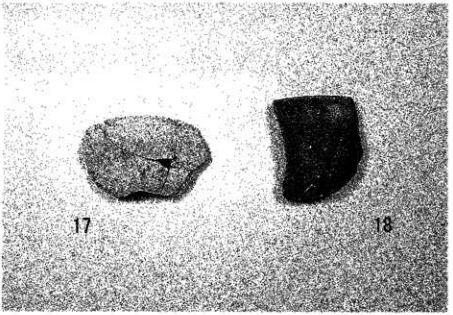

13

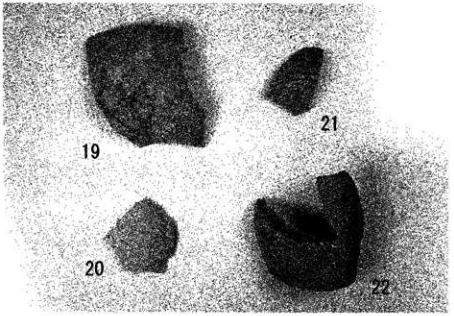
14

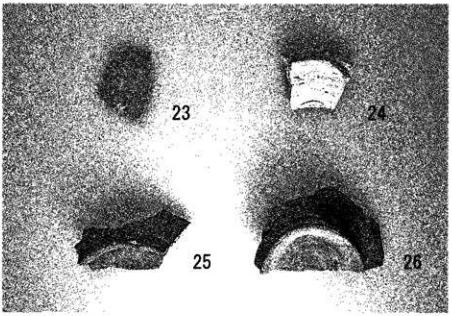

15

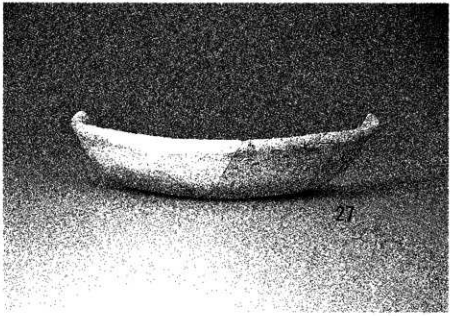
図版15

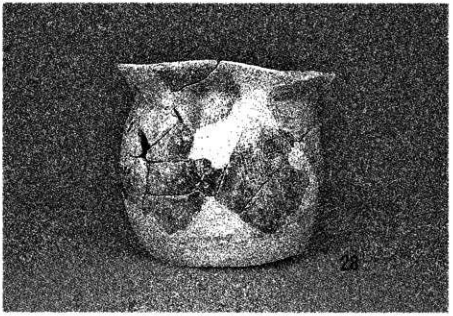




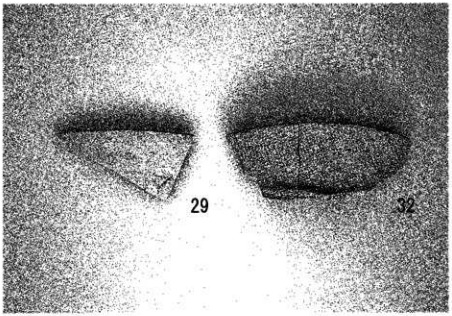


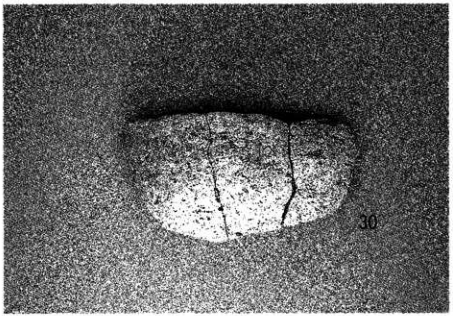

23
24
25
26

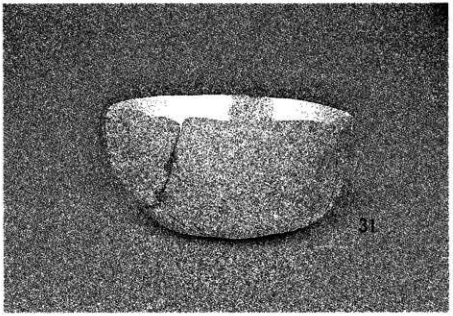

27


28

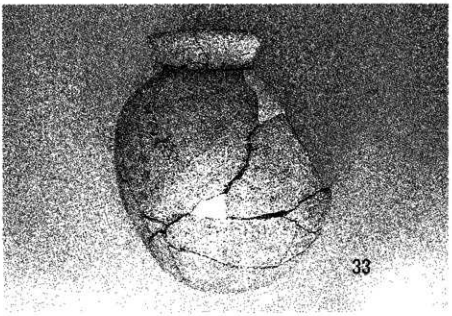
図版17

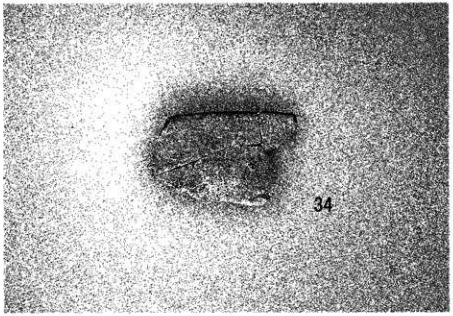


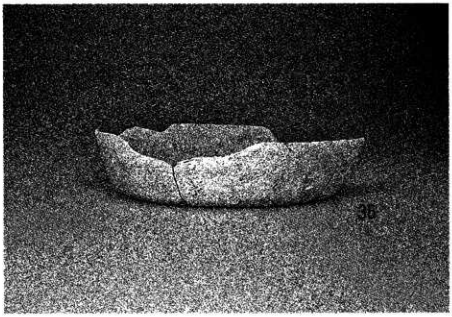


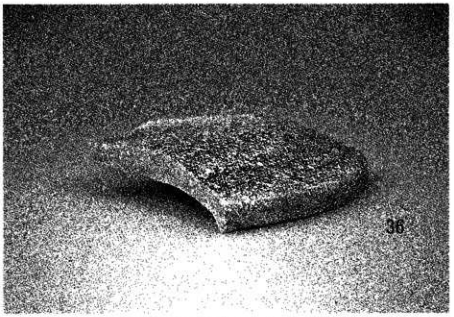


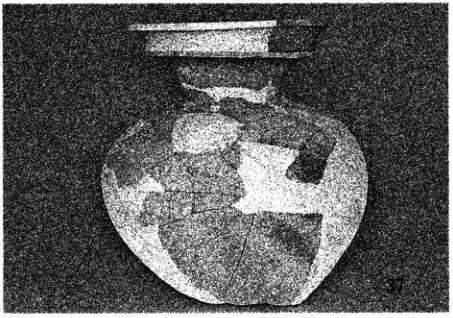
図版18

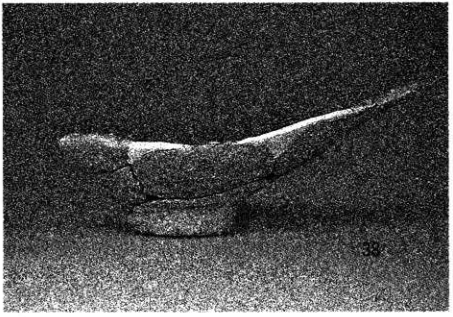




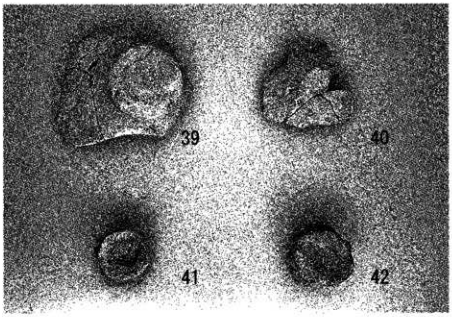


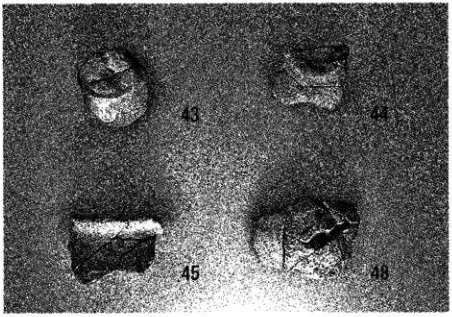

36

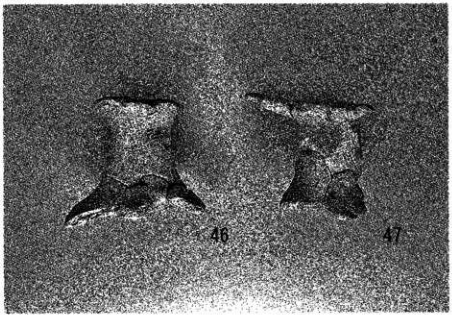

37


38

図版20







報告書抄録

ふりがな	きどはらいせき
書名	木戸原遺跡Ⅰ
副書名	経営体育成基盤整備事業（市西地区１・２工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	南あわじ市文化財調査報告書
シリーズ番号	第１２集
編著者名	定松佳重・的崎薫
編集機関	南あわじ市埋蔵文化財調査事務所　TEL 0799－42－3849
所在地	兵庫県南あわじ市神代国衙1100
発行機関	南あわじ市教育委員会　TEL 0799－37－3020
所在地	兵庫県南あわじ市湊90－1
発行年月日	2015（平成27）年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積
木戸原遺跡（きどはらいせき）	兵庫県南あわじ（ひょうごけんみなみ）市志知中島（ししちなかしま）・市新・市三條（いちしん いちさんじょう）	28224	950119	34° 17′ 15″	134° 45′ 5″	１次　2005年６月13日～７月１日 ２次　2005年８月１日～８月29日	704㎡ 1,048㎡

所収遺跡名	調査原因	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
木戸原遺跡	経営体育成基盤整備事業（市西地区１・２工区）木戸原遺跡発掘調査事業	集落遺跡	弥生時代 古墳時代 奈良時代 平安時代 中世	掘立柱建物 竪穴状遺構 土坑 溝	勾玉 弥生土器 須恵器 土師器 韓式系土器	

2015年３月31日発行

木戸原遺跡Ⅰ

経営体育成基盤整備事業（市西地区１・２工区）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行　南あわじ市教育委員会
編集　南あわじ市埋蔵文化財調査事務所
〒656-0455　兵庫県南あわじ市神代国衙1100
TEL 0799-42-3849

印刷　はと商業印刷
〒656-0341　兵庫県南あわじ市津井2606
TEL 0799-38-0844